

293 子宮頸部近くに限局する子宮体癌 (子宮体下部癌)の臨床的検討

近畿大

大村元, 小畑孝四郎, 堂國日子, 吉岡忠亮, 井上芳樹,
星合 昊, 野田起一郎

〔目的〕子宮体癌で子宮頸部近くに限局するもの(子宮体下部癌)の臨床的特徴を検討した。〔方法〕1996年までに当科で経験した子宮体癌のうち、子宮体下部癌16例の臨床所見について、体部限局の子宮体癌150例および頸部腺癌21例を対照として比較検討した。また、エストロゲンレセプター(ER)、プロゲステロンレセプター(PR)、Vimentin、Lamininにおける免疫組織学的検討を加えた。〔結果〕①体下部癌の組織分類はG1腺癌7例、G2腺癌7例、腺扁平上皮癌1例、明細胞癌1例で、対照群に比べ、ややG2腺癌が多い傾向にあった。②筋層浸潤の程度は対照群に比べ体下部癌で浸潤の深いものが多い傾向にあった。③脈管侵襲陽性率は体下部癌で43.8%(7/16)、対照群で23.4%(30/128)であった。④骨盤リンパ節転移率は体下部癌で28.6%(4/14)、体上部癌で5.2%(7/134)、頸部腺癌で15.8%(3/19)で体下部癌でリンパ節転移を起こす症例が多かった。⑤腹腔洗浄液細胞診陽性率は体下部癌で50.0%(6/12)、体上部癌で16.0%(20/125)、頸部腺癌で7.1%(1/14)で体下部癌で細胞診陽性例が多い傾向にあった。⑥再発率は体下部癌で37.5%(6/16)、体上部癌で4.3%(5/116)、頸部腺癌で28.6%(6/21)であり体下部癌は予後不良であった。⑦体下部癌のER、PR陽性率は、体上部癌と頸部腺癌の間であった。⑧Vimentin陽性率は、体上部癌および体下部癌とともに低値であった。⑨体下部癌の基底膜におけるLamininの存在率は体上部癌に比べて低く、癌細胞質内にLamininが染色された症例は予後不良であった。〔結論〕体下部癌は内分泌環境、浸潤、転移能の違いから体上部癌とは生物学的悪性度が異なっていることが示唆された。

294 子宮内膜細胞診(EMC)を用いた子宮 内膜増殖症および子宮体癌の分子生物学的診断

日本大

中山靖夫、大谷 香、五十嵐稔枝、木下和哉、
太田裕穂、白川貴士、坂元秀樹、佐藤和雄

〔目的〕EMCは間質細胞の混入が少ないことからこれを用いて子宮内膜増殖症(EH)と子宮体癌(EMCa)の鑑別診断が分子生物学的に可能であるか検討した。〔方法〕正常子宮内膜(EM):20例、内膜増殖症のうち単純型EH(sEH):5例、複雑型EH(cEH):7例、異型EH(aEH):7例、EMCa:30例において、estrogen受容体(ER α , ER β), progesterone受容体(PR), c-erbB2, ezrin(Ez)の発現をEMCと摘出組織で検討した。〔成績〕1) EMCを用いたmRNAの検出は、ER α とPRの偽陰性(EMC陰性、組織陽性)がEM, sEH, cEHで認められたが、aEHとEMCaでは認めず、偽陽性(EMC陽性、組織陰性)はなかった。ER β , c-erbB2, Ezは常にEMCと組織が一致した。2) ER α 発現率はaEH, EMCaでEM, sEH, cEHに比べて有意に高いが(aEH:100%, EMCa:100% vs EM:10%, sEH:20%, cEH:14.3%, $p<0.05$)、発現強度はaEH, EMCaで有意差がなかった。3) ER β は全例で陰性であった。4) PR発現率はaEHで有意に高かった(aEH:100% vs EM:10%, sEH:20%, cEH:14.3%, EMCa:40%, $p<0.05$)。5) Ez発現率は組織学的には有意差がないが、発現強度はEMCaが高い。6) c-erbB2発現率はaEH, EMCaでEM, sEH, cEHに比べて高く(aEH:100%, EMCa:100%, EM:50%, sEH:20%, cEH:42.9%)、発現強度はEMCaで有意に高かった。7) Ez発現強度は筋層浸潤に関連したが、臨床病期、gradeとの相関はなかった。〔結論〕EMCを用いたRT-PCRは間質細胞の影響が少なく、内膜上皮に発現の高いmRNAの選択的検出に有用である。ER α 発現は正常、良性内膜病変とaEH, EMCaとの鑑別に、PR発現はaEHとEMCaの鑑別に、またEzおよびc-erbB2発現強度はEMCaの診断に、さらにEMCaにおいてはEz発現強度は筋層浸潤の補助診断に有用である。